

論文内容の要旨

専攻名	経営意思決定 専攻	氏名	岡田 みずほ
題名	急性期病院における看護部門の効率性と職務満足に関連 包絡分析法 (DEA) による効率性分析を応用した看護部門の可視化		
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究は、重症度が高い入院患者を多く抱える急性期病院 A 病院の看護業務量調査を用いて、看護業務の効率性を測定すると共に、その効率性と職務満足の関係を明らかにすることを目的として次のような方法で研究を行った。</p> <p>急性期病院の一般病棟 7 対 1 入院基本料算定病棟に勤務する看護師の 1 週間分の看護業務量をワークサンプリング方式で収集した。サンプリングする業務項目は 35 項目に分類され、業務単位ごとに割合を算出した。その結果、最も割合が高い看護業務は「記録」業務であり、全体の 24.1% を占めた。た、2009 年から 2 年おきに行われた業務量調査結果を比較すると、「記録」業務の増加が著しいことが明らかとなり、看護業務の中でボトルネックである業務を特定した。</p> <p>次に、看護師の働き方が効率的であるか否かについて検証し、効率性を高めるための方法について検証するため、包絡分析法 (DEA) を用いた。前述した看護業務量調査の結果のうち、周辺業務の割合を入力変数として、看護師の勤務人数と総超過勤務時間を用いる入力指向包絡モデルと、療養上の世話の割合と総入院患者数を出力変数とする、出力指向モデルの両方を用いて効率性を測定した。その結果、同じ一般病棟 7 対 1 入院基本料を算定する病棟間でも効率値に違いがあることが明らかとなった。</p>			

氏 名	岡田 みずほ
<p>まず、入力指向モデルで効率値が低い病棟を特定し、入力変数である「周辺業務」を削減するための改善点が病棟毎に異なることを明らかにした。さらに、効率的フロンティアに近づくために超過勤務時間をより多く縮減する必要がある病棟でも同様に改善点が異なっており、DEA を用いることで効率性を向上させる改善案を細かく提示できる新しい手法が構築できた。</p> <p>次に効率値の経年変化を評価するために、Malmquist 指数を用いた。その結果、2009 年度～2017 年度を 2 期に分けた時、前期も後期の期間のどちらも全要素生産性を向上させているのは 1 つの DMU のみであること、後期の生産性が向上している 10 の DMU であり、全期間を通して全要素生産性が低いのが 3 つの DMU であることが明らかとなった。</p> <p>看護業務の効率性を向上させるうえで、職務満足は大きな影響を及ぼすものであると考えるが、先行研究において看護分野における職務満足と効率性との関係を調査した研究は見当たらないため、本研究においてその関係性を明らかにした。</p> <p>これまで看護分野における職務満足度測定に関する文献レビューを基に、看護師の仕事に対する価値のおき方と満足度を測定する中山、野嶋が開発した尺度を用いて、「全く思わない」から「非常に思う」の 5 段階で得点化した。さらに、仕事の満足度を看護業務の効率性に高低により 2 群に分けて比較検討した。その結果、一般病棟 7 対 1 入院基本料を算定している病棟の看護師の仕事に対する満足度は、35 点満点中平均 18.7 点だった。仕事の満足度を構成する 7 項目の中で平均得点が高かったのは「職場の人間関係」であり、概ね職場風土は良い状態であることが伺えた。また、看護業務が効率的な病棟ほど職務満足度が高い傾向が認められ、職務満足度が高いほど職場の人間関係が良く、専門職としての自律性、決定権などが認められていると感じている職員が多かった。また、効率性の影響を最も受けるのが職場の人間関係であることも明らかとなった。</p> <p>これまで多くの施設が取り組んできた看護業務量調査に DEA を組み込む新しい手法を構築したことで、さらなる看護業務の可視化が進んだと言える。さらに、今回効率性と職務満足度の関係性を明らかにできたことは労務管理上も業務管理上も意義がある。</p>	